

伊丹市教育委員会教育長殿
伊丹市立高等学校長殿

要望書

伊丹・生活と教育を考える会

入江智哉君は、この三月に九年間の義務教育を終え、西中学校を卒業します。その後の進路については、親子で長く思い悩んだ末、伊丹市立高等学校をめざすと決め、親は、その厳しさを思い『要望書』を書きました。その最初の部分には、「おそらく点数もとれないでしょう」「高校に入れることなど思いもしなかった」「非常識な親だと思われるかもしれないが」と書かれています。私達にはそんなふうにいるながらも、伊丹市立高校をめざそうとする入江君親子の気持ちが痛いほどわかります。入江君親子のたどってきた道のりは、私達が歩んできた道と重なります。

私達は、我が子が障害を持って生まれた瞬間から今日まで、ふりまわされ続けて来ました。

ある子はニチイ・ジャスコ・長崎屋が、そして今は市場がとても気に入って、通い続けています。人ごみの中を上手に自転車走らせれます。いろいろな店や、働く人の姿がよく見えるように目の位置を高くしようと自転車に

乗るのです。瀬戸物屋のおばさんが、広告の紙で茶わんを包むようすをじっとながめたり、魚屋のおばさんに氷をもらおうとしたり、あちこちで迷惑をかけながらも通っています。叱られても叱られても通い続けるのです。「ひとりで、自転車でいきます」という我が子を家に閉じこめるわけにもいかず、心配でたまらないけど送り出す母親。いっしょに歩いた方がどれだけ楽かわかりません。母親はじつと家で待つのですが、時には耐えきれず捜しに行ったり、電話がかかれば謝りに行ったり、「すみません、ここが好きですもん」「すみませんこの子はこしかないんです」と言いながら子どもの事をわかってもらおうと話して来ました。

また一人の父親は、自転車に乗って猛スピードで走って行く我が子をバイクで追いかけているうちに、信号無視でパトカーに捕まったとき、「わしはいつでも捕まるから、あの子を先に捕まえてくれ」と叫びパトカーと一緒に追いかけたのです。日曜日には、いつも外に出かけたが我が子を電車で乗せると、

「小さいの責任を問わない」という内容でした。中学校へ進む時も普通学級を希望すると「この子はみんなと一緒にいる事が苦痛ではないか」と言われたり、「普通学級にいたら、将来行くところがありませんよ。養護学校にも行けませんよ」と言われました。こうした冷たい仕打ちに会うたびに、怒りや悲しみにおそわれて、目の前が真っ暗になって来ました。

そんな中で入江君も小学校は、障害児学級を選びました。しかし、地域の小学校に通っていても子どもたちとのふれあいのないのは「養護や！」と言われたり、遊んでいる近所の子のそばに行こうとすると、「逃げる！」と言って、走っていかれたりしました。バスの中や公園でも似たような事はたびたびあり、世間の冷たい視線をいつも感じていました。しかし、五年のマラソン大会では、はるか遅れて走っている入江君の横をすでにゴールした子どもたちが迎えに行っていて一緒に走ってくれ、女の子二人が自分のタオルでゴールテープを作って待つ中を、両手をあげて「優勝」と言ってゴールインしたことや、周りの子が手作りの計算問題を用意して、いろいろな方法でたし算も教えてくれ、入江君もとても楽しそうにしていたというような嬉しい事も、いろいろありました。また、入江さんが

たまに学校で入江君の世話をしていると、「おばちゃん、智君一人で出来るで」と反対に注意され、「いっしょに」と智哉の出来る事、出来ない事をちゃんと知ってくれているのだと感心し、同時にこれがとてもたいせつだと思うような事もありました。

そんな中で入江さんは、中学校は普通学級にしたいと考えるようになりました。不安はいっぱいありましたが気持ちを決め話をする、中学校や教育委員会からは「みんな自分の事でせいっぱいで一人になりますよ。部活も勉強も大変で、全くかわりませんよ。登下校指導もできませんよ。将来行くところもありますよ」「障級のほうが、この子のためになる、合った指導ができる」などと言われました。

でも、みんなの中で、「誰からも、何も言われなくても、周りの様子をみて自分で判断する力を付けさせてやりたい。六年間一緒にすごした智哉を知ってくれてる友達が大きいことに勇気付けられて」中学校は普通学級に決めたのです。

中学校は三年間普通学級に通いました。まわりにはいつも友達があり球技大会の練習では、ボールのスピードをいつも恐がっていたのにみんなの輪から逃げることもなくボールを打っていました。体育大会のムカデ競争は絶対出来ないと思っていました、みんな

満員の人を押し分け、自分の好きなドアのところに行くのです。子どもの後から「すみません、すみません」といつも頭を下げ続けてきました。

私達には、そのようにしてこの「地域」で生きていくしかないのです。

ところが、我が子を何とか兄弟や近所の子がいる地域の小学校へ行かせてやりたいと思ってもそのたびに厚い壁にぶつかって来ました。「この子に合った学校の方がいいですよ」「障害児学級でいいねにみてもらおう方が、この子は伸びますよ」と言われ、それでも地域の学校や普通学級をめざそうとすると「責任は持てませんよ」と学校や教育委員会からくり返し言われ、あきらめていった親も、数多くいます。

ある親は、地域の小学校を希望した時さえも、就学通知も来ず、待ち続けたあげく「念書を書けば入学を許す」と言われました。それは、「登下校は保護者が責任を持って行う」に始まり、「学校教育に於いて、事故等に合った場合、学校及び教育委員会に対して

足を合わせようと必死になり、見事優勝したのです。朝学習では、友達のプリントを見て自分はそれを写したり、自分の書いた単語を友達に見せようとしていたりしながらがんばっていました。体育の準備運動のマラソンでは、誰に言われなくても自分で半周おくれではあっても走り続けるようになってきました。西中学校の担任の先生は、『入江君の進路保障についての担任の願い』という一文の中で、次のように書いています。

「修学旅行でも事前に、服装違反の生徒がいてみんなの前での指導中、入江君が突然彼の前に行き、顔を軽く叩いて『いけません。ごめんなさい』と言い、クラスみんなもあつげに取られたことがありました。その後は席にかえて、『叩いてはいけません。おしりパチン』と泣きながら反省をしていたのですが、わたしが言っていたことで、きちんとした形で出来なければ修学旅行は取り止めだという言葉を覚えていたらしく、自分が計画表まで作って楽しみにしている旅行が中止になるかも知れないと思ったらいいのです。自分の世界にいつもいるようでも、きちんと私やみんなの話も聞き、そしてクラスのこともよくわかっていことに驚いた出来事でした」と。

私達親は、入江君の心の中を見ようとする先生や、みんなの中で泣いたり笑ったりしな

言えるかもしれません。そのようにして二十
年の年月を炎のように走り抜いて来て、今、
はたして何が変わったのか、何も変わってい
ないのではないか、という暗い気持ちにおそ
われます。確かに伊丹市では、初めて点のと
れない我が子が定時制高校に通うようになり
ました。しかし、勝のことを本当に先生方は
市高生と見てくれるのだろうか、友達はい
るのだろうか、卒業後はどうなるのか、考え
ば考えるほど榊村さんはお先真っ暗な気持ち
になると言います。

しかし、同時にこのどうしようもない壁の
前で、ももんもしながら次のような我が子
の姿に出会っていったことを伝えてくれてい
ます。

「高校の運動会は、どちらかというと、町内
会の運動会みたいな感じで、とても楽しいし
和気あいあいとしています。また、生徒達は、
授業が終わって帰る時も、友達に声をかけ合
いながら、それぞれが散っていくという感じ
です。そんな、ベタつかず、あっさりしたと
ころが気に入ったのか、本人は嫌がらずに通
っています。大人は、何かが入できるVとか
ハやれるVとかにこだわっているの、スト
リートに受け入れられないのだと思います。
ただど生徒たちは、そんな事は気にしていな
いように感じます。その中で、子どもも、し
ばられる事の少ない生活をしながらいろいろ

がら、精一杯生きている我が子の姿にふれホ
ッときさせられます。

しかし、普通学級での生活が、バラ色であ
ったわけでは決してありません。

家に帰ってきた時、カバンの中を見ると、
教科書・ノート・筆箱に菌型がついていたこ
ともありました。筆箱の中を見ると、エンピ
ツまでカリカリとかじるようで、エンピツの
カスが筆箱にいっぱい入っているのです。心
配でたまらなくなって、学校に様子を見にい
くと、弁当を一人で食べていたり、休み時間
も一人でいることがよくありました。仲の良い
女の子の話を聞いても入江君がみんなの中
にいないことが伝わってきました。「皆と一
緒にいるんな経験をさせてやりたい」「思い
出もたくさん残してやりたい」「まわりの人
達にも、智哉という障害児を少しでも知って
ほしい」と願っていた母親の思いとは逆に、
一人ぼっちになっている我が子の姿に悩みこ
んでしまいました。

そんな時期、入江君は入江君で、一人立ち
の準備を始めていたのかも知れません。その
頃、入江君は一人で好きな場所に行きたいた
めに親を振り切って走り出し見失うことも度
々ありました。「一人で……」と言いつつ
た入江君ですが、お母さんは外出だけは、「人
様に迷惑をかけないか……今、何をしてい
るのだろうか……事故に合わないか……」

と待つしんどさに耐えられず、一緒に出かけ
るようになりまし。そんなある日、一人で
外出してしまふ夜の十一時過ぎ前歯を二本折
り、腕を骨折して帰ってきました。一人で帰
ってきてくれたと喜びにはあまりに高い代償
となりました。どこで、どのようにしてそん
なケガをしたのか本人に聞いても、警察やい
ろいろなところに尋ねても今もわからないま
まなのです。また、まわりの友達とのかかわ
りも全く見えなくなり、部活のない日に一緒
に下校してくれていた子も離れ、マラソン大
会ではゴールしないままの入江君に誰も気が
つかないでいるのを見て、お母さんは「我が
子の存在は全くないのか、智哉はここにい
るのになぜふり向いてくれないのか」と落ち
込んでしまいました。「もう普通学級にいるの
は無理なのか、親の思いを子どもに押しつけ
て、一番しんどいのは智哉かな……」という
ところまで追い込まれました。それでも道で
出会った時に「智君」と声をかけてもらった
り、あいさつをし合えることを支えにしまし
ながら耐えていました。

そんな時、「学校に何かをしてもらおうと
期待したらあかん」「まわりに期待したらあ
かん」と、同じ障害児を持つ友人に言われま
した。私達の子どもをとりまく現実をまっす
ぐに見るようにせまるその厳しい言葉を聞い
たとき、入江さんは「今まで考えてきたこと

がすべて否定され、何のために普通学級にい
るのだろう。余りにもさびしい」と感じたの
ですが、一方で少し楽にもなりました。

そしてさびしいことではありますが、まわ
りに期待することをやめた時、我が子も、周
りの子どもや世間の中で、やはり一人さびし
い思いをしたり、しんどい思いをしなが毎
日がんばっているのではないかと思うようにな
った、初めて一人歩きを始めようとしてい
る我が子の姿が見えてきた、と入江さんは言
います。この事実を思う時、私達は、伊丹市
立高校で、現在学校生活を送っている榊村勝
君親子のことを思いうかべずにはおれません。

榊村さんは、勝君の誕生の時から、今日ま
での二十年近くを、「なぜ部落に生まれ、差
別され、障害の故に差別されなければならな
いのか。なぜ「あたりまえ」に生きれないの
か」と悲嘆にくれ、怒り、ときに激しく訴え
てきました。

とりわけ子どもの日常にかかわる学校・教
師に向って、期待が大きいだけにしやにむ
にと言っているほど厳しく要求してきました。
親がたてになって、この子の生きる場を作っ
ていかねば、だれがしてくれるのか、という
せっぱづまった思いにかられていたことでした。
あるいはそれは、家にいても外に出ても気の
休まることのない日々の中で、せめてほっと
できる場所を求めているのが苦しみだったと

な事を学んでいるところです」

榊村君が、とりわけ何か出来るようになって
たわけでもないし、先生が変わったわけでも
ないのですが、それでも二年間学校に通い、
教室に居り続けることで、やはり、何かが動
いているのです。

今、榊村勝君の歩いた後をまた入江智哉君
が、たどろうとしています。入江君は、「三
月十三日西中卒業式、一九九一年四月入学式

……」とお母さんの顔をじっと見つめて言
います。次はどこへ行くのか教えてと言っ
ているようでお母さんは胸が痛くなると言いま
す。

入江君も、榊村君と同じような場を、今、
切実に求めています。

私達は榊村勝君に続いて入江智哉君が伊丹
市立高校に入学できることを切に願ひ、ここ
に要望書を提出いたします。

一九九一年二月

やった！ 朝子の篠崎高校入学を実現させたぞ！

伊部朝子の篠崎高校入学を実現させました。私たちを支え、お力添え下さった皆様にまずはご報告致します。

例年二次募集のなかった篠崎高校で今年は二次募集がありました。女子20名、男子1名の募集でした。締め切ってみると女子7名、男子2名の希望でした。この状況で、希望者全員受け入れは当然のはずですが、そうはなっていないのが高校進学の実情です。一次試験でもそうでしたが、二次試験当日の激烈な現場教員とのやり取りがあり、それはあくまでも朝子を入学させたくない高校の意思の表示でした。朝子の切り捨て・不合格を覚悟しましたが、発表された結果は、受験者全員の受け入れとなりました。伝え聞くとところでは、現場教員の判断は朝子の不合格であったようです。にもかかわらず、朝子の入学を実現させることが出来たのは、金井康治君・佐野雄介君の二人によって始められた闘いの積み重ねが切り拓いたことです。

朝子の入学実現を、学校内立入を拒み続けられていた佐野雄介君と梅村涼さん、二人のおかれている現実に投げ返していきたく思います。

ともに、闘いを続けましょう。

1991年 3月21日
東京都江戸川区篠崎7-3-9

伊部朝子
岩生紀子

私たちの訴え

入江智哉君の伊丹市立高入學に際し

今年、入江智哉君が定時制高校を受験すると聞き、矢もたつてもおられずペンをとりました。

入江さんは中学校に入學する時も、養護学校にしようか西中学校にしようかとずいぶん悩んでいました。今また進路に向けて、定時制が駄目なら養護学校が在宅しか選べないところで岐路に立たされています。

入江君は今、なんでも一人でしたが、外出する時も一人で言い出し、親から離れていこうとしています。親は一人歩きをしようとする我が子に中学卒業後も同世代の人達と共に生活する場所として伊丹市立高等学校を切望しております。

二年前、私たち親子も入江さん親子と同様、この子にとってどうすることが一番いいのかとずいぶん考え悩みました。

入江さんは、「智哉の伊丹市立高校入學をお願いします。」という文章の始めに、「智哉は今年の春、中学を卒業します。幼い頃は騒がしいのが嫌い、人とかかわることが嫌い

でいつも両耳を両手でふさいでいました。でも、小学校中学校の先生方や友達のかかわりの中でまったくといっていい程、やらなくなるまでに成長してきました。とは言ってもやはり勉強はあまりできません。おそらくテストで点もとれないでしょう。こんな智哉を伊丹市立高校に行かせたいと願っていること自体、先生方はなんて非常識なことを言う親だと思われるでしょう。私も智哉を高校へ入れることなど数年前まで全く思いもしませんでした。」と言っています。

入江さんは今まで智哉君を高校に行かそうなんて思ってもいなかったし、想像もしえなかったのです。三年の時には学校から、「普通学級に行っていたら将来行くところがありませんよ。」と言われたり、主人から、「智哉の行くところだけはちゃんとしてやってくれよ。」と言われたりしてどうすればいいのか悩み、時には障害児学級にかえようかとまで思ったりしていました。そんな入江さんを私は正直言っではがゆく思い、親が頑張らな

桝村隆義・照美

あかんのにと思ったりしてきました。

私たちの場合は解放運動に支えられながら地域の保育所、小学校、中学校へと通い続けてきました。それは並大抵のことではありませんでした。（詳細は二年前、私たちが「市立伊丹高等学校へ行かせたい親の願い」として書きましたのでお読み下さい。）が、ともかく運動に支えられ、多くの先生やいろんな人の協力も得てやってこられました。

また、私自身我が子が障害をもって生まれ、目の前が真っ暗になってしまっていた時、ひかり保育園に迎え入れられ、初めて解放運動に触れました。そして二十数年間、部落であることも知らず生きてきた自分に気づかれました。それからというものは我が子のことと部落解放運動にと夢中で生きてきました。勝が中学に入る頃までは、夫婦と一緒に夕食をすることもめったになくくさいでした。そんな私の目から見ても、はたして入江さんは中学卒業後はどうするのか、甘く考えていたらどこにもいけなくなるのに、とむしろあせり

の気持ちで見えていました。

いつもまわりの人達に遠慮し、気がねしながら生きてきた入江さんでした。その入江さんが我が子を高校へ行かせてやりたいという、あるいは先生方からすれば「非常識」な気持ちを抱くようになるまではどれほど揺れ動き、迷い、思いつめ、眠れない日々を送ったことでしょうか。定時制に行かせることに心定めた入江さんの顔つきにはこわい程のものを感しました。どんなにか思い悩み苦しんできた末の、ふるえながらの決心であったことかと思えます。また、そこには同じ障害をもつ子の親や先生方の励ましや支えがありました。それなくして私たちには高校受験など考えられもしないのです。私たちにとって学校への壁は本当に厚いものです。中学校に入る前、私たちはとにかくみんなと一緒に中学校に行かせてやりたいとそう思ってきました。中学校の教師から、「この子らがいたら一人ひとりに光をあてられない。」と言われたりもしましたが、やっぱり地域で生かしてやりたいと笹原中学校に入學しました。中学校に通わせながら、「ここ卒業したらどうしよう。」と思ひ悩んだりしました。中学校三年間生活する中で、ただ座っているように、ただいてるようにならしたりましたが、まわりのようすや子ども達のようす、動作を敏感に受けとめているそういう勝の姿を見た時、中学校

卒業後もみんなと一緒に学校へ行かせたいと思ってきました。

しかし、学校への壁はあつく、障害をもつ子の生きていく場すらありませんでした。そんな絶望のふちに立たされた私たち親子にとってここしかないとした場所が伊丹市立高等学校でした。全日制と同様、定時制高校の壁もあつかったのですが、中学校の先生や育友会の父母、障害児の親と解放同盟に支えられて、我が子の入學を願い、教育委員会と何度も話し合ってきました。

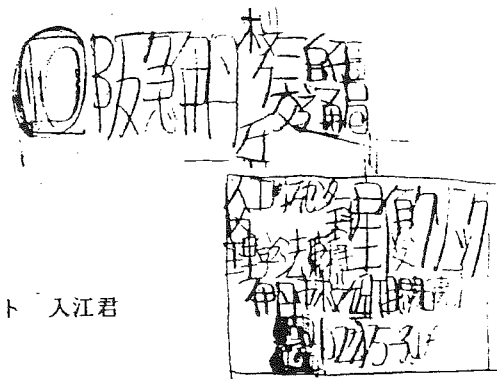
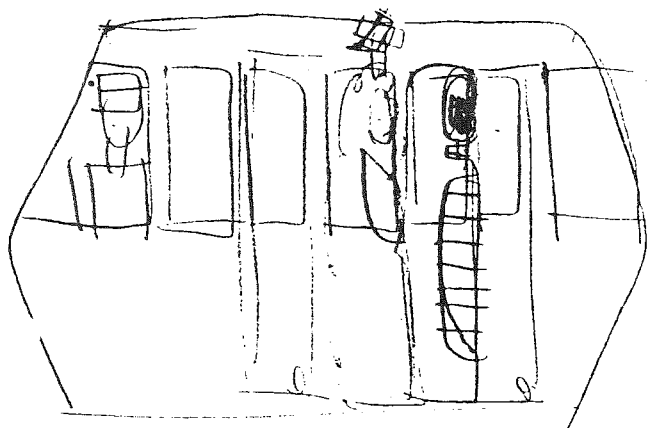
私たち親子の願いをお聞き下さり、伊丹市立高等学校として初めて点数のとれない我が子を受け入れて下さったことに今も感謝致しております。入学式の時、校長先生の祝辞の中に、「今年初めて障害をもつ子ども一名、制度外入學ですが受け入れました。今まで育ててきた両親のことを思えば想像を絶するものがあります。障害をもつ子は社会性を身につけ、君たちは思いやる気持ちを身につけてほしい。そして、まわりの大人や先生方は協力していって下さい。男子生徒一九名、女子生徒五三名入學おめでとう！」と話された時、私たち夫婦は胸を熱くしました。特に男子生徒一九名の中に勝も入っていることに感激し、生徒名簿にもアイウエオの順番に桝村勝の名前が載っているのを見て、「ああ、勝も市高生なんだ。」と涙して喜びました。

しかし、担任の先生に連絡帳を今も書いて頂けないことや学校生活をしている勝の姿を通して、ひょっとして勝は市高生と違うのではと感じるようにもなりました。勇気を出して校長先生と教頭先生にお話させて頂いた時、「市高生であって、市高生でないのですよ。」と教頭先生から言われた時、大きなショックを受けました。教育委員会との話し合いでは、制度外入學ですが勝を市高生として受けて頂いたと聞いていましたし、校長先生の許可証にも市高生として受け入れますとはっきり書かれていました。それが今、市高に通いながら市高生でない、担任の先生がおられて勝の担任でない、親にとってこんな悲しいことはありません。

二年になって池田先生がもち上がりをして下さってとてもうれしかったです。しかし、二年商業科HR通信「すばる」を見た時、「男子一九人、女子七人と桝村勝君の合計二十七人です。」と書いてあり、また、クラスの名票の中にも勝の名前が載っていませんでした。一年の時はアイウエオの順番に勝の名前が載っていたのに二年になると名票に名前がありません。クラスの一人として、一人の生徒としての勝の存在がないのかとやるせない気持ちになりました。私たちの願いは制度外入學であっても、クラスのみならず一緒に生活している勝をこんなところでわけないで受け入

れてほしいだけなのです。日々いろいろと迷惑いっばいおかけしていると思います。また、日頃努力して下さっていることに感謝致しております。ただ、私たちのこの悲しくやるせない気持ちだけは、ぜひわかっていただきたいのです。

二年の二期頃頃からですが、教科の先生の名前を言うようになった時は、少しずつ勝と交わって下さっているのだなととてもうれし



く思いました。今年は全員の教科の先生の名前を覚えたので、初めて年賀状を書きました。先生方からの年賀状を頂いた時は、「毎日あさつするのが楽しみです。」とか「今年もがんばろう。」とか一筆書き添えて下さっているお気持ちが私たちには支えになったり、頑張らなくてはと思ったりもします。また、そうした親の心配や思いわずらい、喜びとは別に勝は毎日学校へ行くことを楽しみにして

カット 入江君

います。運動会は町内会みたいな感じで楽しかったし、和気あいあいとしていました。また、生徒たちは授業が終わって帰る時も、友だちに声をかけ合いながらそれぞれが散っていくという感じです。そんなベタつかずあさりしたところが気に入ったのか本人は嫌がらず通っています。

入江君も小学校、中学校とほんとうに言葉で言い尽くせぬいろいろなことがありました。時にはいじめられたり、一人ぼっちでいたり、部活にも障害をもっているというだけで条件つきで入部したりもしてきましたが、今、入江君は、「三月十三日、西中卒業式、一九九一年四月、入学式……。」とお母さんの顔をじっと見つめて、次はどこへ行くのか教えてと言っているようで胸が痛んだと言っていました。二年前、勝も入江君と同じことを私に言いにきました。その時、入江君と同じく私たちも胸を痛めてきました。幸い、勝は市高に入れて頂きました。入江さんも私たちと同様、これまで共に生活してきたいとなみを大切にしたいと願い、ここしか行き場所がないと定めております。どうぞ入江智哉君を勝と一緒に市高に行けるよう、よろしくお願い致します。

一九九一年二月二十五日

障害児の高校入学を勝ちとるために

決議文

今年、兵庫県下では神戸、西宮、尼崎、伊丹、川西、宝塚等で八名の障害児たちが高校受験に挑む。

二月十日、障害者問題を考える兵庫県連絡会議（障問連）主催で「障害児の高校入学を実現させる交流集会」が行われた。小、中、高の教師と親が一堂に会した初めての高校闘争全県集会であった。親の組織ができて十年余り、普通学級へ行くことなどいっつも小学校の門を叩いた。それが今や多くの人達の支援を得て高校闘争にまできたのだ。

しかし、その高校の門に立つまで、どれほどの煩悶と苦悩の日々があったことか。その「非常識」と言われる気持ちを抱くまでに、そして我が子を一人その門の前に立たせることを考えたときどれほど揺れ動き、迷い思い詰め眠れない日々を送ったことか。その震えるような決心を定時制に託して高校闘争をつつのだ。遊びたい盛りの青年が昼間働き夜定時制に集う。定時制は、きつい労働と、不安定な立場と、そして孤立感を癒し、明日を生きてのびるための場なのだ。そしてそこは、唯

一青年としての自分を取り戻し仲間と一緒にホッとできる場なのだ。その一番後ろに障害児を連ならせたい。

また、今年、神戸では車椅子の少女が全日制を受験する。その前で揺れ動く気持ちには同じなのだ。「脳性マヒで友達と同じように高校に進学するということが難しいということを知りとてもショックです。手が不自由なので字を書くのにも時間がかかります。テストでも時間がないので書けなかった悔しさを何度もしてきました。そんな日はなんで私だけこんな思いをしているのに報われないのかと思いついて泣いた日もありました」その中で混じって泣いた日もありました。その中で、少女は受験を決意していく。その姿を見て、県教委、神戸市教委に「別室受験、テスト用紙拡大、自分の机の持ち込み、時間延長、総合判断の点で障害が不利にならぬよう配慮すること」等の申し入れを障問連を中心に行い、支援の輪が広がっている。

私達の闘いは、ここしか行き場所がないと定めて高校の門を叩き、その扉をこじあけようとした親子の姿に励まされて進む。そのう

ねりが、たとえ高校に入ってもその内なる厚い壁に、時に崩れ折れそうになる親子をまた励ます。たった一人の障害児の高校入学のために、延べ千人もの人達がつき動かされ駆けつける。この大きな力を発条に今年も障害児の高校闘争を闘っていく。

右、決議する。

一九九一年三月三日

「障害児の高校入学を勝ち取る集会」

参加者一同



定通つぶしを許さぬ会 申し入れ書

申し入れ

今年もまた中卒者にとって大事な岐路となる高校入試の時期を迎えました。

兵庫県下の定時制高校では、ここ数年、定員内にもかかわらず一次、二次試験で二〇〇人を越える不合格者が出ています。今年度は一次試験で一五四人にのぼる生徒が不合格とされました。定時制を必要とする中卒生が、毎年、高校教育の機会を奪われて社会に放り出される現状が続いています。昨年三月、私も「定時制通信制高校つぶしを許さぬ会」が、定員内不合格者を出さぬようにとの申し入れを県教委に行なったさい、同教委は「定員内の充足率を高めるように」と文書で指導している」と回答されました。しかしながら、教委の方針に反して、現実には一次試験において、小野工業十二人・松陽九人・有馬六人・神戸市立長田工業八人、二次試験では赤穂十人・北条三人・市立尼崎工業五人等々多くの定時制高校で、多数の定員内不合格者を出しています。しかも、その理由はいずれの高校も明らかにしていません。私どもの調査によれば、「髪の毛を染めていた」、「中学校の欠席日数が多すぎる」、「筆記用具がシャープ

ペン一本だけだった」、「警察情報では非行歴がある」といった理由により不合格にしているとのこととです。いわば「指導困難」という高校側の予断と偏見によって、可否が決定されるという事態に対して、私どもは怒りをもって抗議するものです。

定時制高校の受験生たちの多くは、家庭のさまざまな事情により中卒後働かねばならぬ者、「学力不振」の理由で全日制に行けなかった者、いわゆる「障害」を持った者など、受験競争に歪められていく高校教育のしわ寄せを集中的に受けながら、にもかかわらず「仲間と一緒に勉強したい」「せめて高校だけは」という切実な思いを抱き、不安にかられながら、定時制の門をたたきます。家庭のことや働き場のことを考え、へこしかないうち学校を受験しています。

とりわけ、「障害」をもつ生徒にとって定時制高校は、「ここしか通えない」最後の高校であります。共に学びたい、高校に行きたいという思いに変わりはありません。小中学校を校区の普通学級に引き続きK君（宝塚市）は、卒業後養護学校高等部へ行けず、「在宅」か「施設」を余儀なくされました。K君は、両親をはじめ周囲の仲間の励ましをうけ

て、同じ年令の青年たちと共に学び生活する場を求めてA高校（定）を受験しましたが、一次試験では彼だけが定員内不合格とされたのでした。二次でも不合格とされながら、「やはり高校へ行きたい」と言って、彼はこの一年間同校へ「自主登校」しつづけています。そのK君の意欲とがんばりに目を開かれ、今年わが子に定時制受験をすすめた母親の一人は、「正直いって不安です。手助けしてくれる友達がほしいです。でも、定時制で生活することで友達もできるのだし、いろんなことも学べるのです。」

このような定時制を必要としている中卒生の切羽つまった思いなど知ることもなく、学力試験の結果のみで、あるいは「指導困難」という一方的な予断のもとに、定員内での切り捨てが行われている事態を、私どもはこれ以上許すことはできません。定時制生徒は「テストの成績」のみを関心事として通学しているわけではありません。仕事に疲れたり、辛いことがあっても、へ学校へ行けば仲間がいる、そこで仕事のこと、将来のこと、家のこと等を話しながら、支えあい、励ましあい、卒業の喜びを目指してがんばり、社会で生きるための生活力を身につけてきました。これ

が定時制高校の、学びの場としての独自性でもありました。

県教委・市教委は、いま、定時制志望者・入学者の減少という「事実」を口実にして、単位制高校の設置を企図し、定通制高校統廃合一大幅な学級減を強行しようとしています。このような高校再編成は、これまでの定通制教育の条件整備の貧困を省みることなく、エリート養成をもって教育とする発想に立つものであり、それは貧困家庭の生徒、「学力不振」者、「障害」生徒を「価値なきもの」として切り捨ててものだと云わねばなりません。他方、東京では「高校へ行きたい」という受験生の思いに耳を傾け、定員以下の希望者の場合は、たとえ点数が取れない者でも、足切りをせず全員受け入れるように、都教委は指導しています。点数が低くても多くの障害

児が入学しています。また、広島では「いつでも、どこでも、だれでも」のスローガンのもと定員内希望者は全員が入学しています。

兵庫において多数の定員内不合格者を出し続けている現状は、早急に改善されねばなりません。むしろ、定時制高校入学者の減少をもたす理由の一つになっていると言わざるを得ません。へ高校へ行きたいという思いを踏みにじることなく、定時制高校への希望者全員の入学を切に願うものです。ついでに新年度入学者選抜試験にあたり、以下のことを申し入れるものです。

記

一、貴校への入学希望者でハンディキャップのある者には、本人の入学したい意思を尊重し、積極的な措置を講じられたい。
二、定員内不合格者を出さないよう、希望者

全員の入学を保障されたい。

一九九一年三月 日

定時制通信制高校つぶしを許さぬ会

会長 玉田 勝郎

- 2・26 第三回公開口頭審理
- 3・1 芦屋地労協春闘勝利・湾岸戦争反対集会・デモに参加
- 3 「障害児の高校入学を勝ち取る集会」に参加
- 4 戦争は絶対イヤッ芦屋市民の会準備集会
- 6 全港湾永島さん「千代田闘争交流会」に参加。尼崎南高校良元分校交渉。
- 7 共同購入実施。

- 8 伊丹市立高校（定）交渉。
- 9 戦争は絶対イヤッ芦屋市民の会駅頭ピラ
- 10 戦争は本場に終わったのか緊急市民集会。
- 11 市芦管理職交渉（定員内充足要求）
- 13 市教委交渉（定員内充足要求）、地域春闘交流集会に参加。
- 14 麦の家運営委。
- 17 麦の家卒業・入学祝賀会
- 18 伊丹市教委交渉

- 9 市芦入学式で校庭に日の丸掲揚、式場内で組合員抗議。
- 12 兵高教阪神支部春闘交流会。
- 13 分会々議（役選他）、「現代史を考える会」
- 訂正とおわび（No.48号について）
- P1 左から六行 市教委行政革行政
- P6 見だし 審理提出書記書証
- P7 中段 左から七行 本誌↓松本

私たちはまた高校の門に向かって行く

抗議

昨三月二十日、伊丹市立高等学校は、入江智哉君たった一人を不合格とした。商業科定員四十名、受験生はわずか十名にもかかわらず、入江君を落とした。「三月十三日西中卒業式、一九九一年四月入学式……」とみんなとともに学校に行くことを楽しみにしていた入江君に対し、伊丹市立高はその門を堅く閉ざし、開けようとしなかった。私たち障害児親子にとって、なんと高校の門は高く厚く冷たいことか。

私たちはそのことを誰よりも良く知っていた。知り抜いていた。点のとれない我が子を高校に入れることなど、かつて思いもしなかったし、希望を抱くことすら私たちには許されていなかった。

その「非常識」な、過ぎたる希いを、心の片隅に抱くようになるまでに、どれ程の歳月を経たことか。どれ程の悲しみと苦しみ、先の見通しのない遅々とした日々を重ねてきたことか。どれ程揺れ動き、迷い、思いつめ、眠れぬ夜々を送ってきたことか。

思えば二年前初めて大谷君が、親なら誰もが思い定めた「死ぬも生きるもこの子と一

緒」という私たち親の思いから離れて、何とか一人の人間として生きていく道を捜したい、みんなに迷惑かけるかも知れないけど、このままずっと施設に行くのはいやや、定時制に行くことで、今まで自分の知らない世間に出たいんや、と言って養護学校高等部卒業後、もう一度定時制高校の門を叩いた。この一事に私たちはどれ程激しい衝撃を受け、揺すぶられ、励まされ、勇気を与えられてきたか。私たちは、我が子の声にならない声を大谷君の言葉、訴えの中に聞き続けてきた。

あれから二年、広島や東京、大阪など全国各地の闘いに続き、兵庫県下でも、障害児の高校進学は少しずつ増えてきている。今年、宝塚や尼崎、芦屋では、例えば点が取れなくとも受験者全員が合格した。

三月十九日、入江さんは宝塚の良元分校の門の前に立った。児玉浩之君がどうなったか、不安で、居ても立ってもおれなかったのである。昨年、点が取れぬというただ一点で定員に満ちていないのに落とされ、それでも仲間

今年再度、高校の壁に挑んだ児玉君に対する一日早い合否の判定に、明日の我が子を見ようとして入江さんは駆けつけた。入江さんにとってはその一日は長く待つには耐え難いものであった。

合格者を告げる白い模造紙に児玉君の受験番号があった。その瞬間、受験決意後のこの半年間、絶対通ることはない、幻想をもってはいけないと自らに言い聞かせ、言い聞かせてきた入江さんの心に、あるいは「というほんのかすかな希望が湧いてきた。さらにその日、尼崎南高校でも、芦屋の武庫高校でも、智哉と同じように点の取れぬ子の入学の報が入ってくる。ひょっとしたら」との、これまで自らに禁じてきた思いがどうしようもなく起こってきた一瞬であった。またそれは、入江さんと共に歩き闘ってきた私たちすべての思いでもあった。

ここに至るまでには障害者が学校にも行けず、閉じられた家で親子がひっそり息を殺すようにして暮らすか、遠く離れた山深い施設に追いやられるしかなかった果てしもなく長い長い時があった。その果てに辛く苦しいことばかりあるだろうが、それでも世間の中で、人と共に生きたいと願い、障害の我が身を、あるいは自分の命よりもいたい我が子、その痛々しい姿のままに冷たい視線の真只中に押し出すことにふるえながら耐え続ける今

がある。誕生の時から幼稚園、小学校、中学校と十五年の時をそのようにして私たちは暮らしてきた。走り抜けてきた。それが私たちの生であり闘いというなら闘いの歳月であった。そして今、定時制の門の前にかろうじて辿りつき、遠慮がちに小さな声で、しかし「こしかないんです」と半泣きになりながら祈るように叩き続け、やっとかすかに見え始めた希望の光であった。二年前大谷喜久君、今年児玉浩之君らが、途方もなく厚く思えた高校の壁にあけた小さな穴から、それはもれ出してきた。

三月二十日午後四時、入江さんは伊丹市立高等学校に立った。そこには、この間共に闘ってきた「伊丹・生活と教育を考える会」の親や教師、入江さん親子のことを我が事と考える者たちが芦屋、宝塚、川西、西宮、神戸、遠く姫路からもかけつけた。

しかし、入江智哉君の受験番号一〇〇五番だけはなかった。この日入江君だけでなく、川西の富田君、神戸の福本君、野橋さんもあり落とされていた。

市高の田中英二校長は、「ここしかないんです」と訴える私たち親の話しを「聞かせてもらってよかった」と言い、入江さんの「智哉の伊丹市立高校入学をお願いします」を始め、担任、桝村さん、「考える会」の要望書

全てを受け取り、全職員に配った上で、入江君の定員内不合格を決めた。それではあの三月十五日、何人もの教員に見つめられ、緊張し続けながら受けた試験も、入江君をはじめから落とすための儀式でしかなかったのか。私たちは、どうすることもできない憤りを内に覚える。学校の門に辿りつくこともできず倒れていった障害者の無言の歴史を背に今やっと小さな穴を開け、そこから射し込む光にかすかな希望を抱いた瞬間、再びピシャと扉を閉ざした者たちに、止めようもない怒りが憤き出す。

しかもその当の最高責任者である田中英二校長は、三月二十日、私たちが来るのを知っているながら、約束を破り、姿をくらました。やり場を失って抑えようのない怒りを、後に残った教頭に口々に、夜中近くまでぶつけていたその間も、ついに校長からは電話一本入ってこなかった。

田中校長は、要望書を読みながら、親がどんな傷を負いながら高校受験をし、「審判」が下るまでの時を待ち続けたのか知りもしない。逃亡した校長に変わって座る教頭に桝村さんは泣きながら迫っていた。「あんたらに私らの気持ちが分かるか。私が智君のことを応援するいうたら、ほんまにええの、言うのや。市高に要望書出すいうた時も、入江さんが心配して電話かけてきて言うんや。そんな

んして勝君学校行けんようになれへんか、いうて。私も初めは不安やって、校長先生や教頭先生にもの言うの恐かった。けどもうええんや。私は腹くくったんや。勝が市高来れんようになって、智君が入れるんやったらええんや。うちはそない思とるんや」

入江さんも泣いていた。私たちの闘いは常にこのような辛い所を潜って闘われているのである。

また伊丹市教育委員会の関係職員も、私たちが学校に行ったとの連絡を受けるや、たちまち一斉に庁舎を抜け出し、近くの会館で「対策」を練っていたのである。発表の前々日の十八日、市教委はそれまで話を聞いて欲しいという私たちの願いを突っぱねていたのを、ようやく一度だけ話し合う場を持った。そこで、障害児の進路についての親や子の切実な思いを初めて聞いた市教委は、「定員内足りるを行わない、障害児の高校入学を前向きに検討する方向で高校側を指導する」との約束をした。にもかかわらず、それを反故にし、逃げてしまったのである。私たちは決して許しはしない。

障害を持つ子の進路は、せまく、施設が在宅しかない。義務教育後の人生の長さを思うと、障害児やその親の思い悩む気持ちは、はかり知れない。たった四年を同世代の人と共に

に過ぎさせたいと願って、やっとの思いで高校の門を叩いたのだ。

入江智哉君は伊丹市教委と田中校長らによって無慈悲にも落とされた。しかし私たちは決して退きはない。開きかけた扉を閉じさすわけにはいかぬ。

入江さんを励まそうとして「よし、もう一

障害を理由に差別選抜

尼崎市教委と

市尼高校長が排除

市芦救援会事務局

「障害者は普通高校に来るな。養護学校高等部に行け」とする差別選抜が、今春の尼崎学区の公立高校入試で行なわれていた。市立尼崎高校を受験したA君が、試験で好成績をあげたにもかかわらず障害を理由に不合格にされた。校長・市教委さらにそれらを弁護する県教委の責任が追及されねばならない。

校長は受験に際し、診断書まで提出させていたが、「通学可」という内容に困ってか、市教委と協議。A君には養護学校の受験も指導されている。

尼崎の総合選抜管理委員会（八校の校長で構成）で市尼の校長が受け入れ困難と表明し、他校長が追隨して不合格とした。差別選抜を

度一からやりなおそう」と言った教師たちの言葉に、「せめて折り返し地点に来たのだ、と思わせて」と静かに言った入江さんの辛い思いに、逆にもう一度心を締め直され、私たちはまた市高の門に向かって行く。

一九九一年三月二十一日

行なった校長とそれを追認した教委の責任を追及し、公開された選抜委員会によって選抜を実施させなければならない。

編集後記

今春から土・日の勤務が入ってきたせいか、どうも体の調子が悪い。ズルズルと通信が遅れてしまい、会員の皆様方には大変申し訳ないと思っています。でもそんな中で、今春は伊丹での「親の会」の面々の元氣な闘いぶりに、端っこで連なってきた、元氣を少しわけの酒と話は格別だった。二回も私宅に泊ったTさん、ヨメさんも正直いってあきらめた。

入試成績いいのに不合格 理由は筋委縮症

市立尼崎高
「設備ない」

4月7日 (朝日)
今春、市立尼崎高校（木津松明校長）を受験した尼崎市内のA君（16）が、学力テストでは合格ラインを越えていたのに、筋委縮症を理由に不合格になったことが六日分かった。合格発表の翌日、両親の問い合わせに、木津校長が「入試成績は十分だったが、受け入れ設備が整っていない」と説明したという。県教委は「身体的条件を理由に、入

学を拒否することはないはず」といっている。A君は中学校時代、母親が付き添い授業中は校内の別室で待機、用便なども手伝ってきた。介護人なしで受験、牧正人市立尼崎高校の頭によると、握力は弱いが、筆記などに不自由はない。この三月まで、A君が在学した南武庫之荘中学校の校長だった藤田辰夫さんは「市尼高に受験を打診した

ら「過去に障害を持った生徒が卒業したこともある」といわれた。親や本人も普通高への進学を強く希望していたので受験させた。合格発表の日市尼高校長が「残念ながら不合格となりました」と知らせてくれた。合格できた子だと思っていた」といふ。

勉強頑張ったのに

A君の話 身体は不自由だけど、その分、勉強は人並み以上に頑張ったのに悔しい。市尼に行けるなら、コンピューターの仕事をめざして勉強したい。クラブ活動にも挑戦してみたい。